

# 地位としての足袋の出現

根 間 弘 海\*

## 1. 本稿の目的

足袋の出現については拙著『大相撲の歴史に見る秘話とその検証』(2013)の第6章「足袋行司の出現と定着」でも詳しく扱っている<sup>1</sup>。出版後も足袋の出現時期に関しては継続して調べていたが、それを以前よりも少し絞り込むことができた。以前はまったく考慮しなかったおもちゃ絵を新しい資料として加えたために、以前あいまいだったことがかなり鮮明になってきた。本稿は内容的に以前の拙稿とあまり変わらないが、新しい視点を提供することができるようになった。それを本稿で提示し、次のことを指摘したい<sup>2</sup>。

- (1) 以前の拙稿では、足袋が現れたのは文政7年から天保4年のあいだであると指摘した。本稿では、それを文政末期か天保初期とし、もっと具体的には天保2年だと推測する。そのために、本稿では新たに根拠となる資料をいくつか提示する。
- (2) 草履が地位として現れたのは天明7年12月である。草履を許された行司は木村庄之助(7代)である。そのとき行司は足袋も履いている。しかし、その時の

---

\*専修大学名誉教授

足袋は草履に付随した履物である。すなわち、草履を履くことに伴い、足袋を履くことが許されていた。

- (3) 草履を履く前の行司は素足だった。足袋だけの行司は当時いなかった<sup>3</sup>。草履以外の行司はすべて素足だった。したがって、草履を許された行司は素足からいきなり草履を履いたことになる。
- (4) 本稿では、錦絵に加えて、新たに「おもちゃ絵」も活用している。おもちゃ絵は確かに緻密な描写が少なく、信頼性に欠けるきらいがある。しかし、足元だけに焦点を当ててみると、意外と信頼性が高いことがわかる。錦絵は入手できる数が極めて少ないが、おもちゃ絵は幾分多い。おもちゃ絵は錦絵で得られないことを補足してくれるのである。本稿ではおもちゃ絵も見方によって有益な資料となることを指摘する。

本稿は以前の研究と内容が同じなので、活用する資料の中には重複するものもある。錦絵に関して言えば、新しい資料はほんのわずかしかが見つかっていないが、おもちゃ絵は新しい資料としてたくさん参考にしている<sup>4</sup>。

## 2. 草履と足袋

草履が初めて木村庄之助（7代）に授与されたのは天明7年12月である<sup>5</sup>。免許状には草履のことしか書かれていないが、実は草履を許されると、足袋も付随して履くことができた。それは当時の錦絵で確認できる<sup>6</sup>。

### (a) 素足の錦絵

・天明6年3月、谷風と鬼面山の取組、春章画、ビックフォード著『相撲と

『浮世絵の世界』（p. 25）。

木村庄之助（7代）は素足で描かれている。

- ・天明6年11月の錦絵「日本一江都大相撲土俵入後正面之図」、ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』（p. 26）。

木村庄之助（7代）は素足である。足の指がはっきり確認できる。行司名は記されていないが、土俵入りを引いているところから木村庄之助と判断できる。

天明期の錦絵は当時の相撲を扱っている本では数多く見られる<sup>7</sup>。天明7年までの錦絵であれば、木村庄之助は素足である。

(b) 草履の錦絵

- ・天明8年4月、幕内土俵入りの図、春好画。池田編『相撲百年の歴史』（p. 10）。
- 7代木村庄之助は草履で描かれているが、足袋も履いている。

7代木村庄之助は行司免許を授与される前、足袋を履いていなかった。すなわち、素足からいきなり草履を履いたのである。草履を履くときはそれに付随して足袋も履くことが当時のしきたりだったらしい。それで、行司免許状にも草履のことは書いてあるが、足袋のことは書いてない。しかも、草履が許されるまで、行司はすべて素足だった。現在の行司は素足、足袋、草履という順序で進むので、それを天明期にそのまま適用すると、思わぬ誤解を招く恐れがある。

天明7年12月以降、木村庄之助が草履を履いた錦絵はたくさん描かれている。もちろん、同時に足袋も描かれている。本稿では、足袋が独立した履物となった時期に関心があるので、寛政期以降の木村庄之助が草履を履いて描かれている錦絵はほとんど取り上げない<sup>8</sup>。本稿の焦点は、足袋が

いつごろ独立した履物となったかであり、それを解明する手掛かりとして素足や草履に触れているにすぎない。

### 3. 草履格以外の行司は素足だった

木村庄之助以外の行司の履物がどうだったかを確認できる錦絵は非常に少ない。地位によって履物が違っていただろうのかもはっきりしない。しかし、錦絵を参照すると、草履格以外の行司は素足だったようだ。たとえば、木村庄太郎の足元がわかる錦絵がいくつかある。

- (a) 文化13年(1816) 2月の錦絵, 玉垣(大関)と雲草山(小結)の取組, 春亭画, 『相撲浮世絵』(p.86) / 相撲博物館蔵。

行司は木村庄太郎(第4席)で、素足である。玉垣は越ノ海から改名している。

- (b) 文政6年(1823) 10月の錦絵, 小柳と四賀峯の取組, 春亭画, 『江戸相撲錦絵』(pp.30-1) / 相撲博物館蔵。

行司は木村庄太郎(第3席)で、素足である。

- (c) 文政10年(1827) 3月, 阿武松と四賀峯の取組, 春亭画, 相撲博物館蔵。

行司は木村庄之助(9代)で、草履を履いている。阿武松は小柳から改名している。

この錦絵は文政6年の錦絵と図柄は同じである。行司名が木村庄太郎から木村庄之助に変わり、足元が素足から草履になり、画面の力士名が変わっているだけである。

木村庄太郎はかなり上位の行司(第4席と第3席)であり、現在の視点



からすると足袋か草履を履いていてもおかしくない。しかし、この行司は文政6年まで素足である。このような上位にいる行司が素足だったことから、それより下位の行司も素足だったことは間違いない。

この木村庄太郎は文政8年3月に行司免許状を授与されている。これはこの行司が文政11年に幕府に提出した「相撲行司家伝」で確認できる。つまり、文政8年までこの木村庄太郎は素足だった。文政6年から8年のあいだに素足から足袋に変わっていたかもしれないという疑念が出ないともかぎらないが、そのような変化はまずありえないとするのが自然である。他の資料などから見ても、地位としての足袋が現れたのは文政末期か天保4年だからである。

木村庄太郎（5代）と木村庄之助（9代）は同一人物であり、足元が素足からいきなり草履に変化しているし、第4席と第3席にあっても素足だったことから、少なくとも文政8年までは草履格以外の行司はすべて素足だったことを確認できたことになる。以前の研究では文政6年の錦絵にも触れているが、文政8年の行司免許状と文政10年の錦絵にまでは思いが至らなかった。特に行司免許状の授与された年月に留意していたならば、足袋が現れたのは文政8年から天保4年のあいだと期間を限定することもできたはずである。

文化6年9月には木村庄太郎（第4席）の上位にいた木村鬼一郎（第3席）にも草履が許されている。これは吉田編『ちから草』（p.26）で確認できる。おそらくその上位の式守与太夫（第2席）にも許されていたに違いない。二人とも草履を許される前は素足だったに違いない。

なお、学研『大相撲』（pp.52-3）に四賀峯と源氏山の取組を描いた錦絵（英泉補画）が掲載され、キャプションに「文政8、9年頃と推定される」と書いてある。行司は木村庄之助（9代）で、草履を履いている。土俵の周囲に千年川や四ツ車が控えているので、この錦絵は文政8年に描かれているに違いない。四ツ車は文政8年正月場所に東関に改名し、千年川

は文政8年10月場所に鉄生山に改名している。文政8年のどの場所を描いているかは特定が難しい。9代木村庄之助は文政8年3月に草履を許されているので、免許の通りであれば正月場所ということはない。正月場所を題材に描いたのであれば、10月場所前に描かれているかもしれない。いずれにしても、改名した力士を考慮すれば、文政8年に描かれているはずだ。

#### 4. 足袋姿の錦絵

以前の研究では足袋が独立した地位として出現したのは文政7年から天保4年までのあいだであると指摘している。素足が確認できる錦絵が文政6年であり、足袋が初めて確認できる錦絵が天保4年だったからである。先に述べたように、文政8年3月に9代木村庄之助に行司免許状が許されているので、文政8年まで素足だったことがわかった。次に示す錦絵で、足袋は初めて確認できる。

・天保4年(1833)2月, 越ヶ濱と追手風の取組, 五渡亭画, 『相撲絵展』(p.16)。

行司は木村正蔵で、足袋を履いている。

この錦絵がいつ描かれたかに関しては必ずしもはっきりしていないが、先回の研究では天保4年としている。その理由は以前の拙稿に述べてある<sup>9)</sup>。

#### 5. おもちゃ絵と行司の履物

これまでの研究では足袋の出現時期を文政8年から天保4年のあいだとしていた。その期間は約9年もある。もう少しその期間を狭めるような資料がないかを調べていたが、錦絵は新しいものが一つしか見つからない

し<sup>10</sup>、文字資料はどこにその記述があるのか見当もつかなかった。そういう状況で浮かんできたのが、おもちゃ絵だった<sup>11</sup>。この絵図は錦絵ほどの精密さがないので、信頼性が乏しくなる。しかし、足元だけに限定すれば、錦絵とあまり変わらない。素足、足袋、草履のうち、いずれで描いてあるかは容易に判別できるからである。おもちゃ絵で難しいのは、それが真実を正しく反映しているかどうかである。

文化期から天保初期までに描かれた「おもちゃ絵」に目を向けると、参考になりそうなものがいくつかある<sup>12</sup>。そのおもちゃ絵を参考にすれば、足袋の出現時期をもっと絞り込むことができるかもしれない。結論を先取りすれば、足袋は天保2年に現れたと特定できる。正確を期すのであれば、文政末期か天保初期としたほうが無難だが、あえて具体的な暦年を特定しておきたい。その暦年が本当に正しいかどうかは、今後の研究にゆだねることにする。

ここでは、参考にしたおもちゃ絵をいくつか示す<sup>13</sup>。

(1) 文化7年10月のおもちゃ絵、長秀画、寺町二條柏宗版<sup>14</sup>。相撲博物館所蔵。

行司は素足で描かれている。

この絵図を文化7年10月としたのは、力士の顔ぶれから判断した。8代木村庄之助はすでに草履を許されていたので、素足で描かれている行司は木村庄之助ではない<sup>15</sup>。描かれた行司の地位は不明だが、当時、行司の足元は素足としてみなされていたに違いない。絵図では東西の力士が入れ違いになっている。すなわち、雷電は西方力士だが、東方力士として描かれている。

(2) 文政初期、おもちゃ絵「新版大角力」、春亭画、西村版、学研『大相撲』（p.183）。

このおもちゃ絵は力士の顔ぶれから文政2年3月から文政3年10月のあいだに描かれたものと推測できる。行司が素足なのか足袋なのか必ずしも明白でないが、素足だと判断した。絵師の春亭が描いた文政6年（1823）10月の錦絵「小柳と四賀峯の取組」があるし、木村庄太郎が素足で描かれている錦絵もある。錦絵とおもちゃ絵を混同するのはよくないという見方もあるが、当時の行司は草履格以外、すべて素足だったに違いない。

このおもちゃ絵の源氏山は文政2年3月に縄張から改名している。また有馬山も小野川から改名している。文政4年2月場所では錦木が宮城野に改名し、千田川は休場している。玉垣は文政4年10月場所を休場している。このような力士の顔ぶれを考慮すれば、このおもちゃ絵は文政2年3月から文政3年10月のあいだのものと判断できる。文政元年10月に宮城野が錦木に改名したが、その場所ではまだ縄張と小野川は改名していない。

- (3) 文政13年（1830）3月、おもちゃ絵「大新版角力三十二附」、絵師記載なし、くさぐさのや蔵、個人所蔵。本稿末尾に資料（1）として提示してある。

行司名は記載されていないが、素足である。

この絵図の力士を番付で調べると、文政13年3月の番付とほぼ一致する<sup>16</sup>。したがって、その年月に描かれたものとして判断してよい。行司の足元は素足である。行司の隣に描かれている呼出しは明らかに足袋姿である。当時、木村庄之助（9代）は草履だった。絵図では草履格の木村庄之助ではなく、他の行司が素足で描かれている。このことは文政13年当時、草履格行司を除いて素足だったものと解釈してよい。それが正しければ、文政13年までは足袋はまだ現れなかったものと判断できる。

文政8年以降天保4年まで足袋姿の錦絵を確認できていないことから、本稿ではこれまで足袋はそのあいだに現れたに違いないとしてきたが、これからはこの期間を改めることにする。このおもちゃ絵で確認したように、

素足は文政13年まで続いていることから、足袋は天保時代に入ってから現れるようになったとあえて指摘しておく。これは大胆な指摘であり、間違っているかもしれない。この指摘が正しいか否かは今後の研究に俟ちたいが、これを支持するかもしれないおもちゃ絵をもう一つ提示する。

- (4) 天保2年(1831)、おもちゃ絵「新撰角力徒久し」、廣重画、ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』(p.35)／個人所蔵。本稿末尾に資料(2)として提示してある。

興味深いことに、この絵図では一人の行司は素足、もう一人の行司は足袋姿で描かれている。足袋姿の場合、足首の上部に横線があり、親指に薄い線がなく、残りの足指が一つにまとまっている。これは足袋姿の典型的な描き方である。足袋姿と素足行司がそれぞれ描かれていることから、天保2年当時にはすでに足袋が出現していたことがわかる。すなわち、天保2年には足袋行司と素足行司の区別があった。文政13年3月のおもちゃ絵「大新版角力三十二附」では行司は素足だったことから、天保2年を境にして足袋行司は出現したことになる。

この広重画のおもちゃ絵は背景が黄色で、素足行司の房色が朱で描かれている。房色の観点でもこのおもちゃ絵は興味を引く。というのは、当時は現在と異なり、上位行司だけでなく下位行司も朱房を使用していたかもしれないからである。その辺の事情は不明だが、天保2年当時、紅白房や青白房はまだ現れていなかったかもしれない<sup>17</sup>。この絵図で描かれた朱房が事実を正しく描いているのであれば、素足行司でもその房色を使用していたことになる<sup>18</sup>。この朱房と行司の地位については、今後詳しく調べる必要がある。素足行司が朱房で描かれているので、当時の房色と行司の地位がどうなっていたかは気になる。そのことを指摘しておきたい。

ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』(p.35)によると、この絵図

は「文政12年（1829）頃」となっているが、天保2年（1831）以降とするのが正しいようだ<sup>19</sup>。内田著『広重』（昭和7年／昭和53年（復刻版），pp. 210-1）に「広重」落款の変遷が示されているが、おもちゃ絵の落款は天保2年のものと一致する。おもちゃ絵の落款は明らかに天保2年以前の落款と異なる。この絵図は本稿末尾に資料（3）として提示してある。

文政13年（1830）3月のおもちゃ絵には行司は素足だが、天保2年（1831）のおもちゃ絵では足袋姿になっている。この相違から、足袋は天保2年に出現したと判断できる。文政末期から地位としての足袋について討議していたかもしれないが、具体的に出現したのは天保2年である。そのためには、少なくとも次の前提が正しくなければならない。

- （1） 広重のおもちゃ絵は天保2年に描かれている。
- （2） おもちゃ絵「大新版角力三十二附」は文政13年に描かれている。
- （3） 二つのおもちゃ絵は足元に関するかぎり真実を描いている。二つのおもちゃ絵は「新撰角力徒久し」（廣重画，天保2年（1831））と「大新版角力三十二附」（絵師不明，文政13年（1830）3月）である。
- （4） 錦絵「四賀峯と小柳」（文政6年10月）では木村庄太郎は素足だが、それは事実を正しく描いている。

このように、おもちゃ絵をいくつか参照すると、文政13年（1830）までは地位としての足袋姿はなかったと言ってよい。もしこれらの絵図がまったく頼りにならない資料であれば、それに基づく判断もまったく頼りないことになる。実際、文化期から天保期までも木村庄之助や式守伊之助は草履を履くのが普通だったのに、不思議なことに、おもちゃ絵図では草履姿の行司がほとんど描かれていない。それがなぜなのかは、今のところ不明である。明確に指摘できることは、おもちゃ絵で行司が描かれる場合、足元は素足か足袋だということである。

天保期に入って、足袋を確認できる資料は天保4年2月の錦絵である。天保2年と3年の錦絵はまだ見つかっていない<sup>20</sup>。本稿で天保4年だと指摘した錦絵は、もしかすると、天保2、3年のものかもしれない。実際はどうか、今後の研究に俟つことにする。この錦絵以外に、文政末期から天保初期に描かれた錦絵が今後見つからないとも限らない。もし見つければ、足袋の出現時期はもっと明確に特定できるはずだ。それまでは、文政末期と天保初期のおもちゃ絵を根拠にして足袋の出現を天保2年としておきたい。繰り返すが、この指摘が正しいかどうかは、今後の研究にゆだねることにする。

天保4年以降であれば、足袋姿を確認できる資料はたくさんある。たとえば、天保時代の『相撲櫓太鼓』（立川序文・歌川国貞画、天保15年）には草履や素足のほかに、足袋姿の行司が何人も掲載されている<sup>21</sup>。

## 6. 検討すべきおもちゃ絵

本稿では文化期から天保初期までの錦絵やおもちゃ絵をいくつか取り上げてきたが、おもちゃ絵の中には足袋姿で描かれているものがある。錦絵ではそのあいだに足袋だけで描かれているものはない。足袋が描かれているおもちゃ絵をどう解釈すればよいのかわからないが、それをここで取り上げ、その判断は読者にゆだねることにする。もしかすると、その絵には本稿で見落としている重大なことが反映されているかもしれない。

たとえば、次のおもちゃ絵には足袋姿の行司が描かれている。

・文化12年（1815）のおもちゃ絵。北斎画、『北斎漫画（三編）』（pp.6-7）／ビックフォード著『相撲と浮世絵の世界』（p.108）。本稿末尾に資料（4）として提示してある。

このおもちゃ絵は文化12年の『北斎漫画（三編）』に掲載されていることから、その年までにはすでに世に出ていたかもしれない<sup>22</sup>。行司の足元は素足なのか足袋なのか判然としない。踝の上部に横線があるし、親指と足指の区別も明確でないことから、足袋姿だと判断している。そうすると、文化12年当時、足袋を履いていた行司がいたことになる。この足袋姿が真実を描いているとすれば、地位としての足袋がすでに出現していたことになる。

これまで見てきた錦絵やおもちゃ絵では文化12年当時、草履格以外の行司は素足となっていることから、この絵の足袋姿はどう捉えればよいのだろうか。素足でも足袋でも自由に履くことができたなら、足袋姿でも問題ない。しかし、本稿ではそういう解釈をしていない。もしかすると、この絵は天明以前の足元を描いているのかもしれない。北斎が文化12年当時の行司の履物を実際に描いていると仮定すれば、これは本稿でこれまで述べてきたものに明らかに反する。その絵が実際に文化12年当時を描いているか、それ以前に描かれていたかを吟味しなければならないが、描かれた年月を確認する術を知らない。結局、この絵図の足袋姿が真実を描いているかどうかの判断は今後の研究にゆだねることにしたい。

広重画の天保2年のおもちゃ絵とこの文化12年(1815)のおもちゃ絵(北斎画)には重なり合う取組がいくつかある。取組の力士や描き方も酷似している。行司も重なり合うものがある。北斎画(文化12年)の足袋行司は、広重画(天保2年)では素足になっている。行司が同じだとする根拠の一つは、両方の絵図で房の持ち方が酷似している。同じ行司の足元が北斎画と広重画でなぜ異なるかわからないが、絵師・広重は北斎画の足袋姿に疑問を抱いたのかもしれない。すなわち、のちの広重画にある足袋姿が本来あるべき姿で、先の北斎画の足袋姿は文化12年のものとしては正しくなかったかもしれない。北斎の文化12年の足袋姿は事実を正しく描いていなかった可能性がある。しかし、それは広重画から推測したものであり、北



斎画が間違っていたとは必ずしも判断できない。このように、文化12年の足元はほかの錦絵やおもちゃ絵と異なるが、本稿ではその是非はやはり判断しないことにする。

もう一つ北斎画のおもちゃ絵を取り上げておきたい。この絵は本稿の結論と矛盾するものではないが、絵図の描かれた年月が明確になっていない。この絵図は明治11年発行の北斎漫画十一編に掲載されている。本稿末尾に資料（5）として提示してある。

ここで注目するのは行司の足元だが、素足で描かれている。足袋姿が一人も描かれていないことから、この絵は文政13年以前に描かれたものかもしれない。力士の廻しや行司の姿から判断すれば、プロの力士や行司である。どの時代の相撲を描いているかが問題になるが、それは不明である。これが文化期から天保初期までに描かれていれば、すでに見た文化12年の絵図と矛盾する。文化12年の絵図が当時の相撲を描いているかどうかを判断するには、この絵図の描かれた年月が正しいかが重要である。ここでは問題提起だけにとどめ、その解明は今後の課題としておきたい。

## 7. 今後の課題

本稿では足袋出現に関して2つの見方を取っている。

- (1) 錦絵だけを参照すれば、足袋出現は文政8年から天保4年のあいだである。9代木村庄之助が文政8年3月に行司免許を授与されたが、それまでは素足だった。天保4年2月の錦絵「越ヶ濱と追手風の取組」に初めて足袋姿が描かれている。
- (2) 文化期から天保初期までのおもちゃ絵を参照すれば、足袋出現は天保2年である。すなわち、具体的に暦年を指摘できる。広重画のおもちゃ絵は落款から天

保2年以降であり、その絵には足袋姿の行司が描かれている。また、文政13年3月のおもちゃ絵「大新版角力三十二附」では行司は素足で描かれている。

本稿では、おもちゃ絵も足元に関するかぎり、事実を正しく描いているとしている。同時に、錦絵にしてもおもちゃ絵にしても、それが描かれている年月は基本的に正しいものという前提をしている。もしこれらの前提が崩れると、足袋の出現時期もおのずと間違っていることになる。本稿では細心の注意を払い、錦絵もおもちゃ絵も吟味してきたが、思いもよらない間違っただ判断をしているかもしれない。錦絵やおもちゃ絵に対する前提が正しいかどうかは、今後とも注意深く吟味する必要がある。本稿では絵図資料を活用しているが、それは活用できる文字資料が手元になかったからである。文字資料がどこかにあるかもしれないという希望は常に頭にあったが、残念なことに幸運に巡り合えなかった。そのような文字資料を見つけることも今後の課題の一つである。

## 8. 資料

本稿で提示したおもちゃ絵は多くの場合、相撲を扱っている公刊の本や相撲博物館で見ることができる。そのための出典は詳細に提示してある。ここで掲載してある絵図は私が所蔵しているものや著作権に触れないものだけである。江戸時代の錦絵は個人所蔵である限り著作権に触れることはほとんどない。また、明治期以前の書籍であれば、出典を提示してある限り、掲載しても著作権に触れることはほとんどない。しかし、博物館所蔵の絵図となると、所蔵権に触れる可能性がある。そういうことで、ここでは著作権に触れないものだけを掲載してある。

資料（1）：「大新版角力三十二附」，絵師記載なし，文政13年（1830）3月。

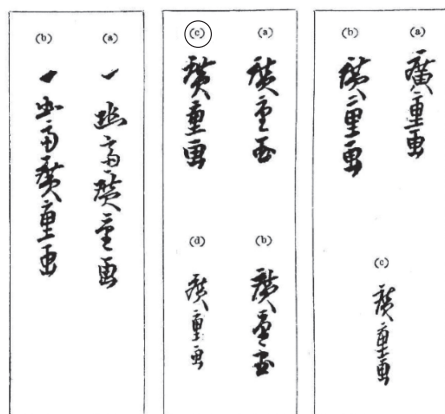


資料（2）：「新撰角力徒久し」，廣重画，天保2年（1831）。

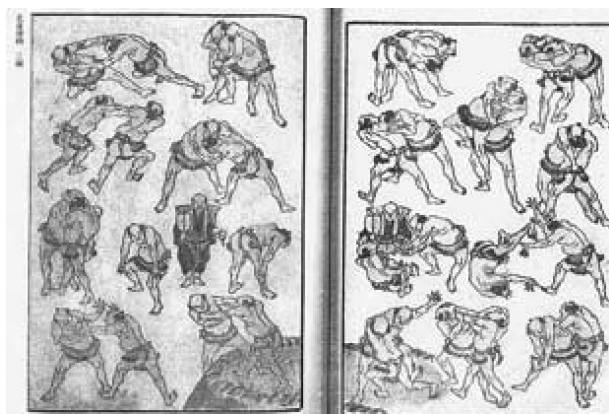


資料（3）：絵師・広重の落款, 内田著『広重』（昭和7年／昭和53年（復刻版）, pp. 210-1）。

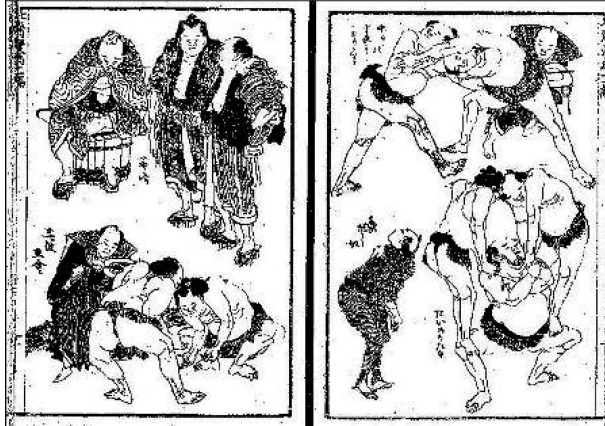
内田著『広重』によると、真ん中の四角括弧の丸印で囲んである落款は天保2年である。これは広重画「新撰角力徒久し」（天保2年）の落款と一致する。



資料（4）：北斎画、『北斎漫画（三編）』（pp. 6-7），文化12年（1815）。



資料（5）：「北斎漫画（十一編）」（明治11年発行）。絵図の描かれた年月は不明。



#### 注

- 1 拙著では第6章となっているが、これは『専修人文論集』第92号（2013）に「足袋行司の出現と定着」（pp. 165-96）として発表している。
- 2 この項では相撲関連の本に掲載されている錦絵を活用しているが、相撲博物館でも所蔵している錦絵をたくさん見せてもらった。ここに改めて感謝の意を表しておきたい。博物館所蔵の錦絵や絵図は一定の手続きを踏めば、許可を得て見ることができる。
- 3 天明期以前には足袋だけの行司も見られるが、その足袋は地位としての履物ではなかったようだ。天明8年春場所に初めて草履が許されたが、それ以前は素足である。草履に関しては、たとえば『専修人文論集』第103号（2018）の拙稿「地位としての草履の出現」でも扱っている。
- 4 おもちゃ絵の中には描かれた年代の特定が難しいものがある。そのような絵は本稿では基本的に取り上げていない。おもちゃ絵を見る目をもっと磨けば、本稿で割愛した他のおもちゃ絵が貴重な資料になったかもしれない。
- 5 7代木村庄之助に授与された行司免許状は9代木村庄之助が幕府に提出した文書「相撲行司家伝」に記されている。この「相撲行司家伝」は天明期や文政期の相撲に触れた本で見ることができる。
- 6 草履を履くとそれに付随して足袋も履いた。それを確認できる文書資料の一つには酒井著『日本相撲史（上）』（p. 216）がある。拙著『大相撲の歴史に見る秘話とその検証』（2013）の第6章「足袋行司の出現と定着」でも触れている。
- 7 天明期以前の履物が行司の地位によって一定の決まりがあったかどうかは不明である。天明7年以前までは素足、足袋、草履のいずれも見られる。たとえば、明和期の木村庄之助は足袋を履いているし、天明期の7代木村庄之助は素足である（ともに酒

- 井著『日本相撲史(上)』, p.99/p.95)。7代木村庄之助の絵図では、キャプションに「寛政時代」となっているが、「天明期」とするのが正しい。なぜなら、天明7年12月以降、7代木村庄之助は草履を履いているからである。
- 8 寛政以降でも木村庄之助は昇進と同時に草履を許されていたわけではない。たとえば、11代・13代木村庄之助は襲名当時、足袋だけを履いている。それは、たとえば、学研『大相撲』(p.75/pp.122-3)の錦絵で確認できる。
- 9 錦絵で描かれている取組は人々の関心を引いた後で描かれるのが普通である。ただどの本場所だったかを判断するのが難しい。その判断によって錦絵の描かれた年月も異なることがある。
- 10 新しく見つかった錦絵は先に提示した「阿武松と四賀峯の取組」(春亭画、文政10年(1827)3月)である。この錦絵では木村庄之助(9代)は草履を履いている。
- 11 本稿では本格的な錦絵でない絵図を一括して「おもちゃ絵」としている。おもちゃ絵と言っても描き方が丁寧で、描写の仕方がしっかりしたものもある。このような絵図を「おもちゃ絵」として括ることには抵抗感があるが、本格的な図柄の錦絵と区別してあえて「おもちゃ絵」としてある。
- 12 錦絵だけでなく、おもちゃ絵に関しても相撲博物館にお世話になった。ここに改めて感謝の意を表しておきたい。所蔵権の問題があるかもしれないので、博物館の所蔵である錦絵やおもちゃ絵は本稿では掲載していない。
- 13 他にもその描かれた年代を絞り込めないおもちゃ絵がいくつかある。これらの絵は足袋の出現時期を特定するのに参考にならないため、本稿では扱わないことにした。
- 14 このおもちゃ絵は相撲博物館所蔵のもので、小さな長方形の紙切れのようなものである。相撲関連の本にそれが掲載されているかどうかはわからない。
- 15 当時の木村庄之助(8代)は寛政11年3月に行司免許を授与されている。すなわち、草履格の行司である。
- 16 この場所、柏戸は外濱から改名している。御所傳も立田川に改名しているが、どういうわけか御所傳となっている。このような問題は少し見られるが、全体としては文政3年の番付と一致する。文政13年11月にも本場所があり、12月に天保に改元している。天保元年は12月だけである。したがって、天保元年には本場所はなかった。
- 17 朱房や紅白房だけでなく、黒房も天保以降に現れたかもしれない。黒房は房色として最下位なので、行司の階級が房色で表されるようになったときからずっと使用されていたと思っていた。このことは拙著『大相撲行司の房色と賞罰』(2016)の第2章「軍配の房色」でも触れている。しかし、この考えは間違った思い込みだったかもしれない。黒房が最下位の房色としていつ現れたかは改めて調べる必要がある。
- 18 当時でも、木村庄之助は紫白房を許されていた。これ以外の行司は地位によって房色が区別されていたかどうかははっきりしない。広重画のおもちゃ絵では素足行司が朱房で描かれているので、当時はまだ地位による房色の区別がなかったかもしれない。
- 19 ビックフォードが何を根拠に「文政12年」としたかはわからない。その根拠を示し



ていないからである。内田著『広重』は昭和7年に出版されているので、ビックフォードはその本を見ていた可能性がある。落款以外に「文政12年」と判断する根拠があったかもしれないが、それがわからないのである。

- 20 天保元年（1830）に改元したのは文政13年（1830）12月中なので、相撲の足袋に關する天保期の資料は天保2年以降となる。
- 21 残念なことに、『相撲櫓太鼓』の絵図は白黒である。したがって、位階の違う行司の軍配の房色が判別できない。カラーで描かれた絵図であれば、下位の行司の房色を判別できたはずである。天保14年頃、朱色以外の房色、たとえば紅白や黒の区別ができたかもしれない。今のところ、紅白と黒の房色が現れた暦年はまだわからない。その手掛かりが欲しくて、『相撲櫓太鼓』の絵図がもともとカラーで描かれていたかもしれないと思い、博物館や公文書館などにあたったがやはり白黒のものしか見つからなかった。
- 22 文化12年以前に描かれたかもしれないが、ここでは『北斎漫画（三編）』の発行年月から文化12年のものとして扱うことにする。

#### 参考文献

- 『江戸相撲錦絵』（『VANVAN 相撲界』（1986年新春号）），ベースボール・マガジン社。
- 酒井忠正，『日本相撲史』（上・中），ベースボール・マガジン社，1956（S31）／1964（S39）。
- 堺市博物館（制作），『相撲の歴史—堺・相撲展記念図録—』，堺・相撲展実行委員会，1998（H10）3月。
- 『相撲』編集部，『大相撲人物大事典』，ベースボール・マガジン社，2001（H13）。
- 『図録「日本相撲史」総覧』（別冊歴史読本），新人物往来社，1992（H4）。
- 『相撲浮世絵』（別冊相撲夏季号），ベースボール・マガジン社，1981（S56）6月。
- 立川焉馬序文・歌川国貞画，『相撲櫓太鼓』，1844（天保15年）。
- 土屋喜敬，『相撲』，法政大学出版局，2017（H17年）。
- 戸谷太一（編），『大相撲』，学習研究社，1977（S52）。（本稿では「学研（発行）」として表す）
- 根間弘海，『大相撲行司の伝統と変化』，専修大学出版局，2010（H22）。
- 根間弘海，『大相撲行司の世界』，吉川弘文館，2011（H23）。
- 根間弘海，『大相撲行司の軍配房と土俵』，専修大学出版局，2012（H23）。
- 根間弘海，『大相撲の歴史に見る秘話とその検証』，専修大学出版局，2013（H25）。
- 根間弘海，『大相撲行司の房色と賞罰』，専修大学出版局，2016（H28）。
- 根間弘海，『大相撲立行司の軍配と空位』，専修大学出版局，2017（H29）。
- 根間弘海，『大相撲立行司の名跡と総紫房』，専修大学出版局，2018（H30）。
- 根間弘海，「地位としての草履の出現」『専修人文論集』第103号，pp. 301-322，2018（H30）。

ビックフォード, ローレンス, 『相撲と浮世絵の世界』, 講談社インターナショナル, 1994 (H6)。英語の書名は SUMO and the Woodblock Print Masters (by Lawrence Bickford) である。

古河三樹, 『江戸時代の大相撲』, 国民体育大会, 1942 (S17)。

山口県立萩美術館・浦上記念館 (編), 『相撲絵展』, 1998 (H10)。

吉田追風, 『ちから草』, 吉田司家, 1967 (S42)。